

■第30回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 使徒言行録4・8～12

ペトロとヨハネの二人は、「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。そして、彼の右手を取って立ち上がらせてやる」(使徒言行録3・6～7)すると、足の不自由な方は癒された。二人がこの奇跡を行えたのは、「キリストの名によって」と語った言葉で、聖霊が働く。「み言葉は神であった。……み言葉の内に命があった。」(ヨハネ1・1～4) 神は霊である。(ヨハネ4・24)

このイエスこそ、「家を建てる者らの捨てた石が、隅の親石となった。」(詩編118・22) この箇所が引用された理由。

当時の古代建築において、建物の基礎になる石を「隅の石」と呼び、この石を正確に置くことが完成に不可欠な条件でした。これと同様に、神の救い(計画)を完成させるための必須条件はイエスの存在です。このイエスは民衆に拒絶され、捨てられ、死んで復活されたことにより、人を救うことができる「隅の親石」となった。このイエス以外に、人を救うことが出来る人はいない、とペトロは語る。

●第2朗読 1ヨハネの手紙3・1～2

ヨハネは語る。神が私たちをいかに愛しておられるかについては、私たちの罪を償わせるために、神の子であるイエスを十字架につけたことで分かります。信仰者となった私たちは神の子ですが、世の人はこのことをまだ知りません。また、わたしの今後の歩み方についてはまだ知りませんが、イエスが再臨される際は、聖霊の働きや深い信仰体験より、わたしの姿は、復活されたイエスの姿に似る、と確信しています。

●福音書朗読 ヨハネ10・11～18

復活節第4主日は、ヨハネの福音書10章、羊飼いとその羊について読まれます。

羊飼いと羊の関係を、親子にたとえると良く分かる。親は子のために良かれと思うことについて話しをたり行う。子も親が話すことや行うことを見みて愛されていることを知る。だが、共に人なので親子の思いが通じない場合もある。ここでは、羊飼いはイエス、羊は私たち。この関係において、「女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。自分の腹にいた子を憐れまないだろうか。たとえこの女たちが忘れても、このわたしはお前を忘れない。」(イザヤ書49・15) この思いが主にある。

神とイエスとの掟(命令)は、私たちのために命を捨てること。イエスは、私たちの罪を償うために命を捨てることで掟を守り、再臨されることになりました。

神によって人は創造され、与えられ生涯を歩むことになり、イエスの死と復活によって私たちの罪は償われ希望が与えられました。これらのことを黙想することにより、信仰を高め深められるでしょう。